

「68年」から現在を問う

③ 王寺賢太

(フランス思想・文学)



おつじけんた 1970年ドイツ生まれ。北九州市と東京都で育つ。パリ西大博士。2005年から京都大人文科学研究所准教授。専攻はフランス思想・文学、社会思想史。特に18世紀と20世紀の政治経済思想、歴史叙述を中心に研究する。人文共同研究の成果として『現代思想と政治』(ポスト68年)と『私たち』(68年5月)と『私たち』(いずれも共編著)。

京大人文研 90年の学知

良彦班長)の第3論集であり、17年に始まった「フーコー研究」班(小泉義之班長)の第1論集である。収録したのは、昨人文研で開かれた公開セミナーでの10人の講演。その一貫した問題は、1968年の出来事をどう理解するか、そしてその思想・理論をどう受け継ぐかにあった。

68年5月、フランスでは学生運動と労働運動が期せずして一気に盛り上がり、全国規模のゼネストが数週間続いた。論集巻頭には、その出来事に居合わせた西川長夫・祐子夫妻が撮影した鮮やかな写真50点余りも収められている。68年は世界的に学生運動が高揚し、「新左翼」と呼ばれる政治潮流が登場した時期でもある。「帝大解体」や「産学協同」批判を掲げた日本の全共闘運動もその一つだ。



1968年5月9日、ナンテルの学生処分を反対する学生大衆デモ(参加者3万人)。警察隊に進路を阻まれ、パリのポールロワイヤル交差点にたむろするデモ参加者たち。西日が美しい(西川長夫氏撮影) 1968年5月、パリ・ソルボンヌ大学の中庭。毛沢東主義の女学生たち(同)

諸潮流花開く 政治、思想に圧倒的影響力

当時のフランスでは、構造主義・ポスト構造主義の諸潮流が一気に花開いた。日本では1980年代に現代思想の名で流行現象になった諸潮流である(中心人物の浅田彰氏は当時、人文研助手だった)。現代思想の出発点には、私(主体)が存在し、外界の事物を対象として知る、あるいは対象に働きかけるといふ、近代哲学の大前提への懐疑がある。主体も対象も、両者を包む構造(言語・政治経済など)が生み出す効果ではないか。構造のなかで私がお認識し、行為するとしたら、そのとき構造は私に、私は構造にどんなふうに関わりあっているのか。現代思想はこうした根本的な問いとともに、哲学・人類学・精神分析・マルクス主義・文芸批評など、人文学諸領域で圧倒的影響を及ぼしてきた。

68年の政治と思想の共通点は、こうして近代的思考の前提を根本的に疑うところにある。旧左翼が、労働運動を主力として国内政治の民主化を追求したのに対し、新左翼はむしろ良き労働者・良き市民の規範そのものを問題にした。学生・女性・失業者・各種マイノリティーなど、いたるところに左翼の戦線が拡大したのもそのせいだが、それは階級闘争や「革命」の展望を周縁化する逆説的な結果も生んだのだ。

学生運動の遺産は風前のともしびである。現代思想もアカデミックな専門研究の対象になったとはいえないが、人文研自体が無用者扱いされるありさまだ。

他方、グローバル化の下、世界中で誰も資本主義の危機を語っていないのに、誰もその後の展望を示せずにいるのも事実である。だから現在、68年を問うことは、それを無批判に

共同研究「フーコー研究—人文科学の再批判と新展開」班は先日、イタリアの思想家サンドロ・メツァーンドラ氏(ポロニヤ大准教授)を招き、フランスの思想家フーコーが、どのようにマルクスを考える上でフーコーやマルクスを参照することに意味について班員らと意見を交わした。



メツァーンドラ氏(右)を招いて開かれた研究会(京都市左京区・京大人文研)

マルクスの階級闘争概念 今も重要 伊の思想家招き研究会

受け入れることではけつしてない。しかし、この危機にも「ブレイクスルー」があるとしたら、それは科学技術の「イノベーション」からではなく、資本主義とは違つリズムで、私たちの現在を問い直す、68年の継承者の側からであるだろう。人文研は、そんな根本的な問いの牙城でありつづけた。 (寄稿) 毎月第3木曜に掲載します

供される連続的な労働力へと変形される必要がある」との言葉に着目。「紛れもなくマルクスを参照した上で、労働が『人間の具体的本質』であるという考え方を根底から批判した」と読み解いた。

さらに、マルクスが労働力の「格納場所」以上の意味を見いださなかった身体について、フーコーは「労働力が生産力へと変形する過程における『身体』の重要性を強調した」と説き、現在の労働者の管理や移民問題を考える上で「フーコーが私たちに開いてくれた可能性ではないか」と話した。

研究会には一般市民も参加しており、「現在、マルクスを読み直すことに意味はあるのか」などと質問を投げかけた。メツァーンドラ氏は「マルクス主義に関心はないが、マルクスが考えた階級闘争の概念は現在でも重要だ。今日の資本主義社会を批判的に捉えるため、マルクスを参照しながら新しいツールを作り上げる必要がある」と話すなど、会場は学術的な思想研究の枠を越え、政治を問いつづけていった。(阿部秀俊)